

最古期のナスレッディン・ホジャ笑話集

— フローニンゲン写本の伝承史上の位置 —

松 村 恒

1. はじめに

西アジア圏のトリックスターであったナスレッディン・ホジャは民族・国家・言語圏を超えて愛好され、その人物にまつわる笑話集も各時代・各地域で何度も編纂され、その伝承史は複雑な様相を呈する。従ってその人物名にも少なからぬヴァリエーションがある。西欧には早く18世紀にモルダウの学者カンテミールにより紹介され、ゲーテも知っていたという。しかし研究ということになると19世紀を俟たねばならなかった。研究史の初期にはホジャ・ナスレッディンという名称が使われ始め、今日でも辞典類の見出し語に踏襲されることもあるが、これは西洋のホジャ研究の創始者ともいべきヴェッセルスキーが始めた言い方であり、イスラム圏ではナスレッディン・ホジャの形が一般的である。これはこのトリックスターの起源のひとつの地域とみなされるトルコの言い方であるが、元来この二つの人名要素はトルコ語ではなく外来のものであった。すなわちナスレッディンはアラビア語ナスル・アド・ディーン「宗教の勝利者」に、ホジャはペルシア語のハージュ「様といった敬称」に由来する。本来この宗教指導者の職業名称であったものが、笑話との結びつきから固有名詞の様な扱いに転じていった。

イスラム圏では古い伝統の中にこのトリックスターへの言及が見られるものの、近代的な意味での狭義の学問的研究は上述のドイツのヴェッセルスキー並びにフランスのドクルドマンシュ等により19世紀のヨーロッパにて先鞭が付けられた。以来汗牛充棟という程ではないにしても、研究の流れが綿々と続くわけであるが、西洋だけでも研究者の分布は多くの国にまたがり、論文の執筆に用いられる言語も独・仏を初めとする西ヨーロッパ語のみならず、東欧の言語にもまたがり、また印欧語の範囲を超えてハンガリー語もあり、当然のことながら地元トルコの研究者もトルコ語でその所説を発表している状況である。従ってその研究史を正しく辿ることは筆者には不可能であり、初めからかかる企ては放棄せざるをえない。

それよりももっと深刻な問題は、一次資料そのものにある。今日一般にナスレッディン・ホジャの笑話集というものの概念は固定化され限定された形にはなっていないものの、それなりのイメージは確立しているといえよう。しかしその起源となると曖昧模糊とした闇の彼方にある。アラビア起源かトルコ起源かについてはまだ追求されねばならない問題が残っている。また通常我々が手にするナスレッディン・ホジャの笑話集というものが、どういうものであるのか、すなわち伝承史上どのような位置にあるのかを知ることは容易ではない。

ごく一般的にはトルコで編纂されたものが起源に近いようであるが、トルコ以外のチュルク語圏に伝わる笑話集も多数ある。今日の中国でも阿凡提の名に帰せられる笑話集があるが、直接にはウイグルに起源するものである。またチュルク語圏を超えて、イスラム圏であるペルシアにもある。ある時期トルコの支配下にあったギリシアにも現代ギリシア語に成る集成本がある。

以上の様に、一次資料にも二次資料にも複合的な要素があり、筆者の如き者の接近を拒む大きな壁が存在する。従って我々がこの笑話集に何らかの関わりを持つとすれば、包括的な把握は断念し、視点を限定する必要がある。

2. 起源問題

既に述べた様に起源問題からして一語族の範囲を超えた事情があるので、一次資料に溯って検討することはできず、偶々目にした二次資料に依拠するだけであるが、その複雑さ困難さを認識するよすがとして概略を記しておこう。

問題としている笑話集の主人公であるトリックスターの人物像は、地理的な広がり異常に広く、各地のトリックスターの属性を合わせ持つこととなる。人物像として古いものにはアラビアのジュハーがある。アラビアの学者はトルコの集成本はアラビアのものに基づいていると主張する。このアラビア本『ジュハーの物語本』はイブン・アンナディーン⁽¹⁾の書店目録(377/987年⁽¹⁾ 編纂)に既に言及されている。この書は15、16世紀にトルコ語に翻訳され、その主人公についてはトルコの地に既に存在していた「ナイーヴな人物」であるナスレッディン・ホジャと同一視されたということである。

アラビア学者の主張は多分にナショナリスティックであった。上にも既にトルコの地に存在していた、と言われる様にジュハーとナスレッディン・ホジャの物語伝承は互いに別々に発展してきた。それぞれの物語は19世紀になり印刷本として刊行される様になるが、そこで収録の物語が混淆し、両者の間の区別が明確でなくなってきた。それぞれが元来口承伝承である上に、物語集成本の批判的校訂本というものが存在しないので(本来的にそうしたものの作成はあり得ないのだが)、個々の物語が元々はいずれに由来するのかを区分けしてゆくことは簡単にはできない。しかしそれぞれ、特にジュハーの方は古文献に言及されることもあり、また写本伝承をもたどることにより、ある程度まではいずれの伝承に溯るのかといった同定作業は可能であろう。

そのために個々の古資料を解説・検討してゆく作業は、あらゆる場合の基礎となるもので欠かすことができない。

3. 日本の現状

我が国でナスレッディン・ホジャは戦前にイスラム関係の雑誌に数話が紹介されたこともあるが、散発的であった。まとまった紹介は護雅夫によるものが嚆矢である。昔話学者が比較の材料として使用するのには殆どこれに依っていた。またこの訳書に付けられた解題がこの笑話集に関する情報の出発点でもあり、関係諸方面に基礎知識を提供していた。この点で我が国のナスレッディン・ホジャ研究に護の果たした役割は極めて大きい。しかし翻訳書としての問題点は残されていた。トルコ語の古代語・現代語の両方に通じた稀代の学者である護であるからトルコ語から訳されたのは当然であった。しかし底本として選定されたものは、たまたま東洋文庫に所蔵されていた通俗本数冊であり、笑話集の伝承史上の中で何らかの意義を持つものが選ばれたのではない。しかもその数冊から適宜抜粋して訳された上に、個々の物語の出所が記されなかったのは致命的欠陥となった。訳文からトルコ語に遡って検証することができず、また複数の書を混ぜ合わせてしまったので、底本及び訳書を伝承の流れの中に位置付けることが不能になった。また解題もヴェッセルスキーやドクールドマンシュに始まる西洋並びにトルコの研究史を踏まえたものではない。もしそうであれば、翻訳部分はヴェッセルスキーのそれとの連結を顧慮したものとなり、昔話研究にもっと便利な資料を提供できたであろう。笑話集の和訳は古代トルコ史の最高権威であった歴史家の余技であったためか、文献学者に求められるような周到さを欠いていたことは惜しまれる。と同時に、後進の者は先駆者の業績を踏まえて、正負両様の評価⁽²⁾に基づいてその研究を進めてゆくことが要請されるであろう。

その後トルコ文化研究所を主宰する児島夫妻により、相当数の笑話が和訳され、護の時代より数歩先に進んだ観はあるものの、護の残した問題が解決されたとは言い難い。

4. フローニンゲン写本の意義

こうした状況の中で、特定の伝承を解説することは有益であろう。近年の典型的なもの、またヨーロッパ語の訳書の定番的なもの（WesselskiとかBarnhamなど）の底本となったものからの全訳は意義がある。しかし我々にはまだ伝承史の中でも古層に属するものの観察が必ずしも充分ではない。この中でまずフローニンゲン写本を採り上げるのは順当な選択である。しかも Burrill によりこの写本の研究が始められ、全体のファクシミリが公刊されていて、我々は容易に原資料に近づくことができる。ただ Burrill の研究にも不明確な点が残っている。アラビア字による転写は diplomatic にしてあるので、細かい特殊な点を除けばなんら問題がない。しかしローマ字版は決して原文の転写でない。さりとて現代トルコ語による訳というわけでもない。オスマン語解説に現代トルコ語を重ね合わせて読解してゆくのは定石であるが、プラークリットのテキストに対して対応するサンスクリットを置き換えてゆく

チャーヤーというインド古典研究に見られる様な手法というわけでもない。Burrill は読解にあたりトルコ人教師の指導・援助を受けている様であるが、その折々に教師の語ったトルコ語単語をそこに嵌め込んだのではないかと想像される。同論文には英語訳もついているが、これはオスマン語原文にきちんと対応していないことがしばしばである。転写でも翻訳でもない不思議なトルコ文が与えられているのである。また英語部分もトルコ人教師が物語の筋をたどるために語ったものが英文になっている様である。

かかる事情の中で我々にはオスマン語自体から逐語的な和訳を作成することが当面の課題となる。また本写本に含まれる76話には、護訳と重なるものが極めて少ないことに驚かされる。トルコ文化圏の中でも初期の伝承は、現代に膾炙されている物語内容とは相当に違っていたことがわかる。小論はこのテキストの訳註を主体として、今後の更なる研究の基礎たらしめるものである。

註

- (1) ヘジラ暦ユリウス暦を併記する。
- (2) 護の世代の学者は和漢の詩文にも通じていたためか、訳文がこなれていて非常に練達の訳になっている。『東方学』では護の弟子筋にあたる人達が護を語る企画があったが、その中で護の訳書をひたすら誉めていた。確かに賞賛に値する業績ではあるが、ただ仲間内で誉めるだけでは最良の引倒しになってしまう。

== * * == * * == * * ==

フローニンゲン写本ナスレッディン・ホジャ笑話集の和訳と注解

松村恒・野崎真未 共訳

以下にフローニンゲン写本ナスレッディン・ホジャ笑話集の和訳と注解を呈示する。和訳の成立について簡単に述べると、松村・野崎の両名は2006年の演習の時間並びにその他の時間を用いて、フローニンゲン写本を読解した。野崎はこのテキストを中核にすえながら、ナスレッディン・ホジャを素材としたトリックスター論をまとめて、比較文化学部卒業論文として提出した（Appendix 参照）。その後もテキストの検討を進め、ここに呈示する形態にまでこぎつけた。両名の共訳とする所以である。野崎の所論全体はいくつかの改訂増補を施せば公開できる内容であるが、それにはまだ若干の時間を必要とするので、取り敢えず今求められるテキストの訳註部分を公表したい。このテキストを選んだ理由としては次の事項

が挙げられる。

- i) トルコ系の伝承としては古期に属する（オスマン期）。
- ii) 和訳されたものはまだない（本邦初訳の作成が可能）。
- iii) 近代の英語等の集成本にも収録されていない物語が多々含まれている。⁽³⁾
- iv) Burrill 1970 により一通りの研究と資料（影印版など）が出揃っていて日本にいても原資料に近づき易い。

和訳文作成については以下のことがらを心掛けた。和訳文は原則として逐語訳に徹した。こなれた翻訳を作るのが目的ではなく、オスマン語原文の理解を示すことを一義的に考えたからである。原文はトルコの語り物の特徴のひとつとして、定動詞形に伝聞・推量の完了を表す *-miş* が多用されている。護 1965 は昔話の語りを筆録したかのような工夫した訳文になっている。例を挙げると「訊いたげな・・・乗ったげな・・・おっ魂消たげな・・・答えたげな」(8b) とある。しかしこれは煩わしいので拙訳では採用せず、物語の末尾にだけ「と言ったとさ」という日本昔話の締めめの句を借用することにした。

また原文には直接話法が頻出し、発話文は「と言った」で分断されることがよくある。即ち

ホジャは「・・・」と言った「・・・」

とあるが、発話が切られるのは訳文ではスマートではないので

ホジャは言った「・・・・・・」

あるいは

ホジャは「・・・・・・」と言った

という形式に直してある。

また文中にはイスラムの用語その他があり、説明は丸括弧内に、補いは角括弧内に添えることにした。長い説明を要する術語はそのまま原語を仮名書きし、末尾に語彙集を作ってそちらに説明を委ねた。また下品猥褻な主題を扱う物語もあるので、そうした用語も訳文では原語の仮名書きを与え、末尾の語彙集で意味を説明することにした。

各話には平行話の指摘が必要である。Burrill は全く記していないが、Marzolph 1996: 299-301 には収録されている限りのものだけは少し記されている。これも網羅的ではないので将来的にはより包括的な各話対照表の作成が望まれる。ヨーロッパ、トルコの古い出版物のすべてを実見できたわけではなかったので、今回は Marzolph の成果を転記しつつ、若干の追加を書き入れたのみで留まった。略号は Marzolph のものを踏襲した。但し M = Marzolph 1996.

註

(3) Marzolph 1996 にはかなり収録されているが、すべてではない。

~~~~~

## ナスレッディン・ホジャのお話

伝統の語り部と話し手は語った、シヴリ・ヒサルにナスレッディン・ホジャという聖者がいたと。語り部達はホジャその人・ホジャと妻・ホジャと息子・ホジャと鼯尻筋の四章から成る物語を書いた。第I章はホジャその人についての物語を語り、第II章は妻との物語を、第III章は息子との物語を、第IV章は鼯尻筋との物語を語る。

### 第I章

語り部は次の様にお話を語った：

1.

ナスレッディン・ホジャはある日シヴリ・ヒサルで説教しているときに言った。  
「イスラム教徒諸君、このシヴリ・ヒサルとカラ・ヒサルの気候は同じである」  
「どうしてそう言えるのですか」と「人々が」尋ねる。  
「あそこでわかったことだが、わしのシクとタシャクは同じようであった。ここでもわかったのだが、[このふたつは] 同じである」

M 130, K 17, W 242, Mot J 2274.3.

語り部は次の・・・というのは、この集成本の第1話に冠せられた句であろう。第2話以下には殆ど Hikâyat「お話」が冒頭に置かれている。

シヴリ・ヒサルとカラ・ヒサルはアナトリアにある村であり、ナスレッディン物語の舞台とよくなるところである。詳しくは Boratav 1974.

anda = orada 'there', bunda = burada 'here.' 自分の身体器官の状態が同じであることにより、両地の気候が同じであると判定したのだが、その根拠におかしみがある。

2.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日シヴリ・ヒサルで説教しているときに言った。  
「イスラム教徒諸君、神に感謝したまえ、駱駝に羽をお与えにならなかったことに対して。もし[駱駝に] 羽があったならば、飛んでいって煙突のてっぺんにのっかり、すべてのものをだめにしてしまうだろうから」

M 131, K 16, W 2, 護 259b, Mot J 2564.

olaydı = olsaydı. 仮定形。

Burrill は uça = oçarak とするが、-e による副動詞であるから、わざわざ -erek による置き換えを想定する

必要はない。なお çim のアラビア文字は通常3点を伴うが、本写本では2点が付加されている。

bacalarınız-da. 現代語であれば与格が期待される位置に処格が多用されるのも本写本の特徴である。

konaydı = konurdu. 仮定文の帰結部分で超越形が用いられている。

hep. pe のアラビア文字は通常3点を伴うが、本写本では2点が付加されている。

3.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日説教しているときに言った。

「イスラム教徒諸君、神に感謝したまえ、諸君の尻を前面に創らなかったことに対して。感謝したまえ。いいかな、もし〔尻が〕前面にあったら、毎日君等の顔の前で糞をすることになるからな」

M 132, Kut 18.

allnlarınızda に対しては続いて出現するのに الن للركذه と النللكركذه の二通りの綴りが用いられている。

4.

お話：ある日シヴリ・ヒサルでナスレッディン・ホジャは説教壇にて言った。

「ひょっとしてイスラム教徒諸君、わしは何をこれから話すかわかりかな」と言った。

人々も

「いいえ」と言った。ホジャは言った。

「おわかりでないということなので、わしは何を話せばよいのじゃろう」と言った。

4, 5, 6話は通常はセットで語られている。Joshi V, No. 6. Cf. AT 1826.

写本では hiç を hic と綴っている。

diyeceğin. 1人称単数未来形。

çun = madem ki.

diyeyin ديين に対し5話では دياين と綴る。1人称単数願望形。二つの綴りに関して勝田 2002: 33 n.43 に2説が紹介されているが、オスマン帝国末期の正書法の混乱であることが確認される。この2種の綴りは後舌母音で終わる語幹の場合と言われているらしいが、なおこの語幹部の母音は前舌母音である。

5.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日説教に来た。

「ひょっとしてイスラム教徒諸君、わしは何をこれから話すかわかりかな」と言った。

人々も今回は

「わかりますとも」と言った。ホジャは言った。

「おわかりということなので、わしは何を話せばよいのじゃろう」と言ったとさ。

6.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日説教に来た。  
「イスラム教徒諸君、ひょっとしてわしがこれから話そうとすることが既におわかりかな」  
今回は人々は  
「幾人かはわかります。幾人かはわかりません」と言った。ホジャは  
「こうしなさい、おわかりの人がおわかりでない人に教えるようにと」と言ったとさ。

7.

お話：ナスレッディン・ホジャは麦畑を持っていた。青々としていたがいつも踏み荒らされていた。しかしながらある日畑はとてもよい状態にあった。娘には恋人があったようだ。恋人はその場にやって来て、ホジャの娘と戯れながら娘に言った。  
「さあ、おいで。僕が種馬になるから。君は牝馬だ。」娘は同意したが、恋人が種馬を演じている間に、娘の目はホジャを捕らえた。男は急いで離れて、娘は手に麦の束を持って男の後ろから  
「はいどう、はいどう」と言いながら付いて行った。ホジャは  
「娘よ、そいつは純金のアムをうっちゃって、手一杯の麦のために戻って来るようだ」と言ったとさ。

M 133, K 22, W 292.

書写生のメッデの使用は一貫していない。  
gele mi = gelir mi 「彼は戻って来るだろうか」

8.

お話：ナスレッディン・ホジャはある晩夢の中で戸口で「物乞い」をしていた。[誰かが]手に九アクチェを恵んでくれた。ホジャは  
「いえいえ、これを十「アクチェ」にしてくだせえ、でないと受け取りませんぜ」と言った。これを争っているうちにホジャは目が覚めた。手の中はと見るとなんにもなし。大あわてで再び目を閉じて  
「元に戻しておくれよう。たった九でいいから」と言ったとさ。

M 134, K 23, W 5, Ar 162, Mot J 1473.

kuzgunluğa < kuzgunluk 「玄関通路への小さな扉」  
almazın = almam 「私は取らない」  
görse 直説法の意味での条件用法。



9.

お話：ある日ナスレッディン・ホジャは寺の尖塔を見て  
「これは何と呼ばれているのかね」と言った。人々が  
「町のシク」と言うと、ホジャは  
「それにぴったり合うゲテュはあるのかい」と言ったとさ。

M 135, K 26. cf. Ar 997, also M 94, 241, 354.

10.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日庭に忍び込んだ。人参と蕪を見付けた。それらを  
いくつか袋に入れてとどまっていると、庭番が聞きつけやって来て怒鳴った。  
「ここにお前を誰が連れてきたのか」ホジャは答えて  
「去年の今頃吹いていたとても強い風を知っているよね。それが連れてきたのさ」と言った。  
彼に庭番は  
「何だと。これら [の野菜] を誰が引っこ抜いたんだ」と言った。ホジャは  
「ああ、あっしの旦那、その時の強い風がでさあ。あっしを風が掴んで運んできて、あっし  
が掴もうとするものはなんでも手の内にはいつてきたんで」おっかない庭番は声を荒げた。  
「本当か。これら [の野菜] を誰が袋に入れたんだ」ホジャは  
「神にかけて、あっしもその考えがまとまらないんでさあ」と言ったとさ。

M 136, K 26, W 7. cf. AT 1624, EM 3 (1981), 634.

bunda = buraya 処格と与格の混用である。

11.

お話：ある人がナスレッディン・ホジャに尋ねた。  
「今月は三（月）かねそれとも五（月）かね」  
「月を取って売ったことがないから、知らんよ」と言ったとさ。

M 137, K28, W 17, Mot J 1354.

暦の月と天文の月は同じ ay という単語で言われるので、それをすり替えた返事の面白さである。

مدر と میدر の両形が見られ、綴りが揺れている。

12.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日梯子を使って果樹園に侵入した。庭番 [の足音]  
を聞くとすぐに梯子を頭の上にのせた。庭番がやって来て

「ここで何をしているんだ」と言った。ホジャは  
「梯子を売っているんでさあ」と言った。庭番は  
「ここは梯子売り場じゃないぞ。行け。材木市場で梯子を売ったらどうだ」ホジャは  
「やれやれ、もののわからんお人じゃ。それがあんたにどんな関係があるんですかい。わしの梯子ですよ。どんなところで売ってもかまわんでしょうが」と言ったとさ。

M 138, K 29, W 18, Mot J 1391.2.

کیرمش は10話では کرمش と綴られている。

duyıcakç = duyunca 「聞くとすぐに」 -icek = -ince.

写本では باشنه のğの部分の点がふたつしかない。

اغج という綴りが用いられている。

13.

お話：ナスレッディン・ホジャにある日 [人々が] 言った。

「その鷹は一年は雄で一年は雌であります。何がその理由ですか」ホジャは答えて  
「諸君がそれを知るためには、二年間鷹であった誰かある人が必要ですな。わたしにはわかりません」と言ったとさ。

M 139, K 30, W 132.

devilingeç 雲雀の一種でもあるらしいが、鳥名の特定は難しい。仮に鷹と訳しておく。

ブルルは参考として次のトルコの諺を挙げている。Damdan düşen damdan düşenin halinden bilir. 「屋根から落ちた人が屋根から落ちた人の立場がわかる」

14.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日ラマザン月を過ごしていた。

「何が必要であろうか。わたしは他人に頼ることは止めよう」と [考え]  
「ひとつの壺に一日一個の石を投げ入れよう。三十日になったらバイラムを守ることにしよう」と言った。

こういう意図から壺に日々石を投げ入れていると、娘がそれを見た。ホジャが外出すると、壺に片手一杯の石を投げ入れた。ある日ホジャに [ある人が]  
「[今日は] 今月の何日ですか」と尋ねた。その日は25日の様であったが、とにかくホジャは  
「ちょっとすまんが家に行ってくる」と言った。[家に] 帰り壺にある石を数えてみると、百二十個あった。ホジャは考えた。  
「もしわしがこの通りを言うと『ほれ、ホジャは頭がおかしくなった』と言われるだろう」とりあえず戻ってその人々に

「今日は月の40日だ」と言った。人々は

「おや、ホジャさん。一月は全部で30日だ。あんたが40日だなんて言うのはどういうおつもりかね」と言った。ホジャは

「壺の中の石を数え直してみれば、今日は月の120日である [ことがわかるだろう]」と言ったとさ。

M 140, K 31, W 9, AT 1848A, EM 7 (1993), 878f.

çölmeğe < çölmek 現代語はメタテシスをおこして çömlek 「土から作った壺」

olıcak = olunca. -icek = -ince.

bayram edeyim 「バイラムの儀礼を遵守する」 バイラムについては q.v. 動詞の形は願望法であるが単純未来の意味である。

写本には يكرم と يكرمی という綴りが混在している。

15.

お話：ナスレッディン・ホジャにあるおひとが面倒を見てくれと十羽のを預けた。偶々一羽がいなくなった。ホジャはその人に

「さあ、きょうだい。あんたの鶯鳥を受け取ってくれ」と言った。その人がやって来て、九羽しかいないのを見ると

「おい、ホジャ。このうちの一羽はどこへいっちまったんだ」と言った。そこでホジャは数える。

「十だ」その人も数えて

「九だ」どうもホジャは一羽を二回数えていたようだ。しまいには喧嘩寸前になったがホジャは言った。

「そうだ、きょうだい。十人の人を見つけてこよう。うちに連れてきて、皆に一羽ずつ [鶯鳥を] 持たせればいいのさ」その人も同意したので、十人を連れてきて、鶯鳥をひとつひとつ持たせた。しかし一人が鶯鳥を持てず

「おいホジャ、俺の分の鶯鳥がいらないぜ」と言った。ホジャは

「[お前の分が] 足りないというなら、お前さん鶯鳥がいる間に取ればよかったじゃないか」と言ったとさ。

M 141, K 32, W 143, Mot J 2023, Arabia ridens 1227.

kanda = nereде 「どこに？」

16.

お話：ナスレッディン・ホジャがある日寺へ行った。寺を見ると、その戸口に一匹の犬が居た。

「しっ」と追っ払うと犬は逃げ、説教壇に上がって一声吠えた。ホジャは「なんとこれは馬鹿な生き物なんだ。あいつはここのむかしの説教者だったに違いない」と言ったとさ。

M 142, K 92, W 308.

17.

お話：[ある人達が] ナスレッディン・ホジャに「神学生がひとり水に溺れています。どうやって救い挙げたらいいでしょう」と言った。ホジャは尋ねて「君達のうちで櫛入れ、すなわち財布を持ってるものはおらんかね。それを見せるんじゃ。そいつは中に金が入っていると思って[水から] あがってくるじゃろう」と言ったとさ。

M 143, K 178, W 144, *Makedonski Folklore* 24 (1991), 73-83.

دمش という変則綴りが دمیث に対して用いられている。

18.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日市場へ行く途上で金を見つけた。高い所に登って「金を見つけたぞお。なのに一体人は何で歩いているのか」

M 144, W 145. Cf. Joshi III, No. 9.

akçeyi には写本でヘムゼが付加されているが、これは対格を示すものである。

拾得物は三回大声で宣言して持ち主が現れないと拾い主のものになる、という習慣がある。本話はそのことを踏まえているのであろう。

19.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日コンヤに行った。偶々お菓子屋の前にいた。直ちにお菓子を食べ始めた。そうさせてはならないと見た店の主人が[ホジャの] 頭に一発げんこつをくらわした。ホジャは「コンヤはいいところだ。この人はいい。お菓子を殴ってまでして食べさせてくれるよ」と言ったとさ。

M 145, K 90, W 8.

写本は ایتغاق であるが、 ایتغاق と読む。

başra = basına 「頭に」 ここでこの単語が繰り返されている理由は不明。

20.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日牛を買った。数日してからある人がやって来て、挨拶をした。

「やあ、ホジャ。私を覚えているかね」と言った。彼にホジャは

「いいや」と言った。その人は

「私はあんたに牛を売った男の親戚なんだよ」と言って、家にあがりこんだ。

翌週別の人がやって来て、ホジャに挨拶をして言った。

「やあ、ホジャ。俺を知ってるよね」ホジャは言った。

「いいや、知らんよ」

「俺はおみしゃんに牛を売った男の親戚の村の隣村から来たやつの親戚なんだな」と言って、家にあがりこんだ。

夜になるとホジャは皿に水を入れて、その男の前に麴麴と一緒に差し出した。男は言った。

「おい、ホジャ。これは何だい」ホジャは

「これはあやつがわしに売った牛の肉からのスープのスープからのスープじゃ」と言ったとさ。

M 146, K 137, W 97.

قوشمى に対し قىمش と並列され、綴りの揺れが見られる。

21.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日カラ・ヒサルに行った。[カラ・ヒサルでは] たまたま [人々は] 新月を観察中だった。とうとう大いなる興奮を以て見ることができた。ホジャは

「これはこれは。ここは何と奇妙なところなのか。わしらの町では月が荷車の車輪ほど [大きな] 月を見ても、気に留めることは全くない。ここでは鎌ほどの月になんで寄り集まってくるのか」と言ったとさ。

M 147, K 67, W 52. Cf. A 970, AT 1334.

ラマザンの終わりには新月の次の三日月が現れて、人々はそれを見て断食月が終わったことを確認するのである。ホジャはムスリムでありながら、この大事な儀式を知らなかったので、この滑稽譚が生まれた。

نيجہ は29話では نجہ と綴られている。

22.

お話：ナスレッディン・ホジャに

「これこれの人は断食を破ったんです」と [人々が] 言うと、ホジャは言った。

「おや、他にまた人がいたら、祈りを破っただろうね」

言葉遊びが軸になっている。oruç ye- は Hony 1957: 276b では「意図的に断食を守らないこと」とあるが、逐語的な意味は「断食を食べる」である。ホジャはその言葉を取って「祈りを食べる」(namaz ye- 従って「意図的に祈りを唱えない」となる)と言ったのである。

23.

お話：ナスレッディン・ホジャはある日道を進んでいたが、衣類を洗濯している女の群に出会った。女達はホジャを見るとすぐにアムを顕わにして言った。

「ホジャ、[人々は] これを何と言っていますか」ホジャは言った。

「アムだよ」女達は言った。

「あら、ホジャ、間違っているわよ。これはよそ者の墓場と言われているのよ」そこでホジャは寄って行き、古い布きれをシクに結びつけた。洗い石の上に腰かけて言った。

「やつはひとりぼっちだ」人々は言った。

「おや、ホジャ。それがどうしたというのだ」ホジャは言った。

「これはよそ者のしかばねじゃ。だからここに葬ればよい」女のひとりは同意した。ホジャがそこにいついたので、女は彼のタシヤクをきつく握った。女はいった。

「じゃあ、これは何なのさ」ホジャは

「それはよそ者のむすこで、葬儀に一緒にやって来たのさ」と言ったとき。

M 148, K 3, W 245.

[以下紙幅の都合で省略。文献表も含めて印刷はできているので希望の方はご請求下さい。]

## Glossary

### 凡例

1. [ ] 内の数字は、物語番号を示している
2. 見出し語はトルコ語のローマ字表記とした。( ) 内の仮名書きは時にアラビア語の仮名表記になっていることがあるので、必ずしも発音は一致していない

### A

Allah (アッラー) : 図 イスラムにおける唯一なる神の呼称。語源的には、アラビア語で神を意味するイラーフ ilah に、定冠 al- が付加された al-ilah が同化してアッラーフ (アッラー) allah になったといわれる。

am : 図 (卑) 女性陰部 [7,23,37,56,57,60,69]

aygır : 図 種馬 [7]

## B

bayram (バイラム) : ㊦祭り : 祝祭日、記念日 [14]

## D

don : ㊦ズボン下、パンツ : (古語) 服 : 馬の毛色 [23]

## E

ezan (アザーン) : ㊦礼拝の時刻を告げる肉声による呼びかけで、ユダヤ教のラッパ、仏教・キリスト教の鐘に相当する。集団礼拝に際しては、誰か一人が代表して唱えればよい。

## G

gebe : ㊦妊娠している、子持ちの [74]

göt(ü) : ㊦(卑語) 肛門、けつ、しり : (卑語) くそ力 [3,9,35,42]

## H

helva (ヘルバ) : ㊦とても甘い菓子 (小麦粉・油・砂糖などを固めたもの) [19]

## I

imam (イマム) : ㊦イスラム教の集団の指導者 [27,28,70]

## M

müezzin (ミュエジン) : ㊦イスラム寺院の尖塔から祈りの時を告げる僧 [70]

## S

sik : ㊦男性陰部の棒部分 [1,9,23,27,36,37,58,60,69]

## T

taşak : ㊦男性陰部の玉部分 [1,23,27,28,60]

## Appendix

野崎真未

『トリックスター像の変容の比較文化的考察—ナスレッディン物語の場合—』

pp.iv+59+2. 2006年度大妻女子大学比較文化学部提出学士請求論文

2005年度の在外研修を終えて帰国直後に頭記の論文の著者より、卒業論文のテーマとしてナスレッディン・ホジャ笑話集を選びたい旨の相談を受けた。笑い話やトリックスターの

研究はこれまで多々あるので二次資料を適当につなぎ合わせればそれなりのものもできるが、筆者の個人的関心はあまりそうしたことにはなかった。ところが対話を進めてゆくうちに、著者はこのテーマのためにトルコ語を既に学習したこと、代々木上原のイスラム寺院で講習を受講したことなどがわかった。このあたりの事情は大妻同窓会誌『ふるさと』58号(2006)に本人の筆により記されているので繰り返すには及ばない。外国語の学習は一次資料を読解したいという強い願望がないとなかなか成功しないものである。本人の意向が相当に文献学的であることを知ったので、敢えてトルコ語でなくオスマン語のテキストを読解する決意を尋ねたところ諾の答えが返ってきた。これを機縁として2006年の多くの時間を共同でフローニンゲン写本の読解に費やすことになった。そのプランは秋に学部の会で中間報告として示され、その折りの資料pp.15-16に概要が記されている。

しかしながら筆者は指導教員とは名ばかりで、もとよりオスマン語を習得しているわけでもなく、テュルコロジー一般についても殆ど無知といってよい者である。しかも期間は限られているし、関連資料は身近には皆無といってよい様な研究環境である。こうした悪条件の中で著者の申し出を受けたのは、著者の熱意が何にもまして大きかったことがあるが、筆者自身の側にも若干の事情があった。前年の在外研修の折SOAS図書館でPertev Naili Boratavの仏語・独語・トルコ語の論文の複写を得ることができたこと、またインド滞在中にインド・ムスリムの間でもナスレディン物語が今日なお読み継がれていることを知り、ジャイナ教のテキスト読解の余暇に、グジャラート語のナスレディン物語の絵本を眺めるのが無上の楽しみとなっていたことがある。今日この分野の主導的な学者はMarzolphであるが、研究論文を漁っているうちに、ゲッティンゲン滞在中に訪問したメルヒェン百科事典編纂所での同博士の記憶が蘇ってきて、図らずもいくつもの糸でつながれている思いがしたことその支えであった。

ほとんど無手勝流といってよい状態で作業を開始した二人であったが、読解を進めてゆくうちに本写本の研究の先鞭をつけたBurrillの所論を訂正できる箇所もでてきた。僅か七十余話を含むに過ぎない集成本であるが、完読迄には難渋を極めた。筆者個人はこの訳註だけでも学部生の論文としては充分過ぎるものであると思うが、著者自身はそれで満足せず、比較文化的な文言をその標題に付して、訳註部分を核としながらもナスレディン・ホジャを出発点としながらトリックスター論を展開した。その所論はまだ手直しを必要とする点が見られるが、骨幹は充分であるからそれらを克服すれば公刊も可能である。とりわけ訳註部分は当面この分野で早急に求められることがらであるので、取り急ぎ学部紀要の紙面を借りて公開する次第である。

以下に将来のrevisionを予想しながらも、限られた期間に執筆して提出された作業の成果を記憶に留めるために、本論文の概要を順を追って記し紹介に代えたい。

はしがきにて著者自身の個人的関心の依って来るところが記されて、本論の動機づけが示される。前述の『ふるさと』中の文と多少重なるが、学生がひとつの研究テーマにたどりつ



くまでの過程が示されていて、共感を覚える。目次を挟んで本論への序が与えられる。本研究の基本的方針が示されるのであるが、著者も多く例に洩れず護雅夫訳によりこの物語へと導入されたのである。しかし研究という立場に立ったときにこの本邦初訳は利用が困難なことに気が付いた。まずは物語に通し番号が付いていないということで引用が困難なこと、各話の出典が明示されていないので、原文に遡って検討することが不可能なことが挙げられている。また解題にも不満な点があり、それを補うためのケーススタディがなされることが述べられている。

〈1 ナスレディン・ホジャとはなにか〉本節は概括的な事項なので、先行研究に大幅に依っているが、邦語にはないことがらをMarzolphその他の業績に基づいてよくまとめている。中東の学者と西欧の学者の立場の微妙な違いをも感じ分けていることは興味深い。論証されていないのは残念ではあるが、当面はそこまでは望めない。続く〈2 フローニンゲン写本の和訳と注解〉ここが本論文の中核といっても良い部分である。和訳部分は提出後も更に推敲を重ね相当の改訂を伴って上に掲載したのであるが、和訳部分直前の数頁に於いてオスマン語翻訳にまつわる問題点が指摘されている。

和訳の後に〈3 ケーススタディ〉として数話を事例として選んで、イスラム圏における流伝、イスラム圏を超えた平行話の観察という具合に二方面から物語りの流伝・比較を行い、そこから一般的研究方法への示唆を行う。続く〈4 トリックスター〉ではナスレディン・ホジャを視点の中心としながらも、笑い話の主人公の構造の一般化を試みている。そこにはユングのトリックスター論まで検討され、今日的議論になっている。ナスレディン・ホジャが時には賢者であり、別の時には愚者になっていることに我々は訝しさを覚えるのであるが、正の方向・負の方向という方向付けが問題となるのではなく、ベクトルの大きさがキャラクターの個性を形作るという著者の所論はユニークでもあり、賢愚という判定が今日的であり一面的であることを反省させる。

〈5 結論〉にて心理学者・民話学者の所説をも引き、笑い話の特徴を一般化してまとめて論文の体裁を整えようとしている。末尾には主としてイスラムの用語集、及び文献目録が付載されている。

笑い話の属性の一般化については性急な感がしないでもないが、時間的その他の制約が極めて大きい中でここまで到達した労は多としてよいであろう。とりわけ本論文の価値は容易でない一次資料の読解に敢然と取り組んだことにあり、当学部発足以来5期目にして本邦初訳を含む成果が提出されたことは欣快に堪えない。ここに若干の紹介をいたして、贅辞の表明とするものである。